

資料

2019年度における生物（動物関係）に関する問い合わせ状況

中島 淳・石間妙子・埴 麗文・金子洋平・須田隆一

当所で窓口依頼検査以外で回答した動物に関連する問い合わせの内容について概要をまとめた。2019年度は電話や持ち込み、電子メールによる質問が62件であった。問い合わせは県庁各課・保健福祉環境事務所・県警察等の県機関から33件、市町村から22件、民間業者から3件、一般県民から4件であった。前年度11件の問い合わせがあった特定外来生物ゴケグモ類疑い種の同定依頼は17件と増加した。また、同じく特定外来生物のツマアカスズメバチ疑い種の同定依頼は2件、ヒアリ類疑い種の同定依頼は4件であった。

[キーワード：衛生害虫、ペストコントロール、アリ、ハチ、クモ]

1 はじめに

当所では窓口依頼検査として生物同定試験を実施しているが、それ以外にも日常的に電話や持ち込み等による生物に関する問い合わせに答えることが多い。本報では2019年度に寄せられた質問のうち、動物に関連するものについてその内容をまとめた。

2 方法

動物に関連する各問い合わせについて、依頼元を県、市町村、民間業者、一般県民、その他の5つに区分した。また、質問内容については一般的な不明種に関する同定依頼、ゴケグモ類疑い種（セアカゴケグモ、ハイイロゴケグモ）の同定依頼、マダニ類疑い種の同定依頼、ツマアカスズメバチ疑い種の同定依頼、ヒアリ類疑い種（ヒアリ、アカカミアリ）の同定依頼、生物多様性・外来種に関する一般的な質問、その他、の7項目に区分して整理した。

3 結果及び考察

表1に2019年度の月ごとの問い合わせ件数を示す。全体で62件の問い合わせがあり、最も問い合わせが多かったのは6月の11件で、次いで4月が9件、5、8、9月がいずれも7件であった。全体の問い合わせ件数は2010年度が24件、2011年度が24件、2012年度が57件、2013年度が68件、2014年度が52件、2015年度が51件、2016年度が55件、2017年度が54件、2018年度が57件であり、問い合わせ件数は前年度と同程度であった。

図1に問い合わせの依頼元と件数を示す。問い合わせは県機関からのものが最も多く、県機関では保健福祉環境事務所からの問い合わせが多かったが、ほぼすべての場合において所管市町村または県民からの質問の仲介であった。市町村からの依頼も同様に一般市町村民からの質問の仲介であった。依頼元の傾向は過去と比較して、大きな違いはなかった。

表1 各月における内容別の問い合わせ件数

質問内容	月												計	
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3		
不明種同定依頼	4	2	6	6	1	4	4	1	3					31
ゴケグモ類疑い	2	4	4			3	1	1					2	17
マダニ類疑い														0
ツマアカスズメバチ疑い									1				1	2
ヒアリ類疑い		1			2		1							4
生物多様性・外来種	1													1
その他	2		1		4									7
計	9	7	11	6	7	7	6	2	4	0	0	3	62	

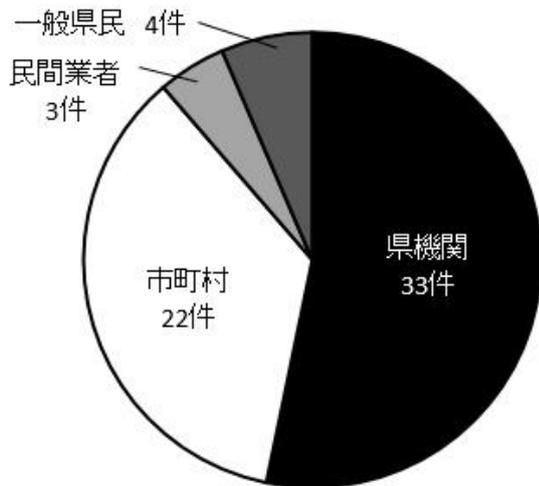


図1 2019年度における問い合わせ元の件数

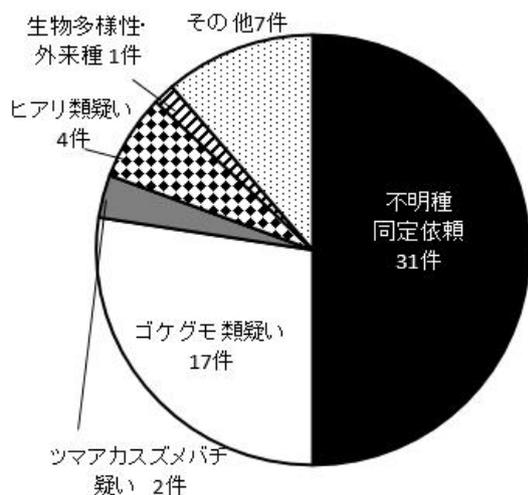


図2 2019年度における内容別の問い合わせ件数

問い合わせの具体的な内容は不明種に関する同定依頼が31件と最も多く、次いでゴケグモ類疑い(17件)が多かった(図2)。2017年度はヒアリ類疑い種に関する問い合わせが12件と激増したが、昨年度は3件、本年度は4件となっている。福岡県では2018年8月に「ヒアリ等対応マニュアル」を公表しており²⁾、これにより各保健福祉環境事務所及び市町村での対応が適切に行われた成果と考えられるが、一方で県民の興味・関心が低下したためである可能性も否定できない。なお、寄せられた4件はいずれもヒアリではなく、カベアナタカラダニ、シリアゲアリ

属有翅雌(2件)、ゴキブリ目幼虫であった。

ゴケグモ類疑い種として問い合わせがあった17件のうち、セアカゴケグモであったのは2件で、その他はオオヒメグモ(2件)、ジグモ(1件)、マダラヒメグモ(1件)、シロホシヒメグモ(1件)、オニグモ(1件)、コゲチャオニグモ(1件)、イエオニグモ(1件)、クロガケジグモ(1件)、タカラダニ類が付着したザトウムシ類(3件)、ザトウムシ類(2件)、同定不能(1件)であった。また、ツマアカスズメバチ疑い種として問い合わせがあった2件は、オオスズメバチとコアシナガバチであった。

不明種同定依頼において種まで同定できたのは、アナグマ、アカミミガメ、ソラマメヒゲナガアブラムシがそれぞれ2件、ムササビ、ソウシチョウ、スズメ、ハリスホーク(モモアカノスリ)、オオタカ、ハヤブサ、インドクジャク、アオダイショウ、クサガメ、ワニガメ、スッポン、マユタテアカネ、ワモンゴキブリ、ヤマトシロアリ、ツマキヘリカメムシ、コガタノゲンゴロウ、ヨツモンカメノコハムシ、ヒラタクワガタ、キタキチョウ、ゴマダラチョウ、ルリタテハ、タテハモドキ、サクラアリ、クマバチ、タイワンシジミが1件ずつであった。このうち、スズメ、ソウシチョウ、オオタカは県域で死亡していたもので、鳥インフルエンザ検査対象種としての同定依頼に対応したものである。また、ワニガメは北アメリカ大陸南東部が原産で、動物愛護管理法に基づく特定動物であるとともに、福岡県侵略的外来種リスト2018において「定着予防外来種」に選定されている外来カメ類である³⁾。本種の県内の野外での発見例はこれまでもあるが、今回は12月に久留米市安武町の農業用ため池で発見された。当該個体は現在、筑後川発見館くるめウスにおいて飼育・展示されている。

本報をまとめるにあたり、クモ類の同定に際してご教示いただいた馬場友希博士(国立研究開発法人農業環境技術研究所)にこの場を借りてお礼申し上げる。

文献

- 1) 中島 淳ら：福岡県保健環境研究所年報，47，105-106，2020.
- 2) 福岡県環境部自然環境課：福岡県ヒアリ等対応マニュアル
<https://www.pref.fukuoka.lg.jp/uploaded/attachment/46188.pdf> (2020/9/1アクセス)
- 3) 福岡県環境部自然環境課：外来種について～外来生物法と侵略的外来種リスト～
<https://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/sinryakugairai.html> (2020/9/1アクセス)